

主張

10月5日から臨時国会(12月12日)が始まり、新婦人は10月19日、創立64年を迎えます。高市政権の「めちやくちやな政治」に立ち向かう女性たちの共同を広くつよめる秋です。

冒頭から、裏金議員でもある農水大臣が、選挙で自分を支持しないからと予算を大幅カットした問題が明らかとなり、沖縄では米兵による女性強姦殺人事件が起こり、女性たちの怒りが湧きあがっています。

物価高が深刻になる中、高市政権は暮らしの大変さに向き合うどころか、財源を示さず、わずかな

創立64年「新婦人に入って」
平和憲法をまもる力に

これらを強行するために女性や市民の政治参加を阻む議員定数削減を企てており、独裁政治まっしぐらです。

黙っている平和な社会は守られない。これは「新婦人ではない」

期間で大増税となる「消費税率品限定2年間1%」を持ち出し、非核三原則を放棄し、GDP(国内総生産)比3・5%、24兆円という未曾有の大軍拡に突きすすむとしてしています。

理由「の問いに答えた次世代会員の言葉です。安心して政治の話がしたい。憲法まもる仲間がほしい」など、この間、入会している女性たちとも共通しています。11月13日には次世代国会行動を準備しています。全国から「新婦人に入って国会へ行こう」と声をかけ、入会が相次いでいます。

希望はここにある。いまこそ戦争につきすすみ、憲法をこわす「めちやくちやな政治」に対抗するシスターフッド(女性の連帯)で「束になる」ときです。創立64年の新婦人への入会を、心からよびかけます。

"黙っていては

全国に仲間がいる

オンラインで

次世代LINEグループで全国ミニ交流(毎月第1金曜夜20時〜21時30分開催)のお知らせがあり、初めて参加しました。グループでのしんぶんタイムなど、少し心配と緊張

張していましたが、政治について誰かと話せることってこんなにうれしく心強いことなんだ!しかもそんな仲間が全国にいるなんて!と胸が熱くなりました。参加できて本当によかった!(20代)

世界と連帯する 国連NGO

核兵器禁止条約

会の五つの目的「核戦争の危険から女性と子どもの生命を守ります」「世界の女性と手をつなぎ、永遠の平和をうちたてます」を求め、核兵器禁止条約署名を国連に届けてきました。これまでに国連に届けた新婦人の署名は、合計1672万人分(1978〜2021年)。



▲女性平和基金のとりくみで、原水爆禁止世界大会などに招待した海外の女性活動家と交流も。写真は8月、長崎での交流会

◀条約発効を祝う宣伝(2021年鹿児島)



64年のあゆみ

— みんなで動かしてきた

〈1960〜70年代〉

各地で班づくり／「ポストの数ほど保育所を」／学校給食は脱脂粉乳でなく生乳を／結婚退職制度中止(写真1面)／職業病を労災に、母性保護を／乳幼児・老人医療を無料に／交通事故から子ども

〈2000年代〉

国連NGOに認証／新婦人しんぶんカラーに／被災者支援／原発ゼロ／地球温暖化ストップ／消費税増税反対／安売法



〈1980〜90年代〉

「軍事費より暮らし・福祉・教育に」「男女平等・女性の地位向上を」、産直運動スタート／ポルノ雑誌自販機撤去／女性差別撤廃条約批

〈いま、さらに〉女性史を切り拓き、「新しいあたりまえ」をつくってきた歩みを引き継ぎ、今「黙らない」「わきまえない」「行動する新婦人大きく」ととりくんでいきます。



准／家庭科の男女共修／災害に公的支援／沖縄少女暴行事件抗議／要求別組が多彩に／新婦人学校を制度化

〈新連載〉

高校生を生きる ～県立学校の教室から～

高等学校教員
日達 綾



今回から連載を担当します。県立高校で教員をしている日達綾です。技能連携校に14年、県内中学校に6年間勤めた後、全日制普通科高校に勤務し10年が過ぎました。今は主に公民的分野と「教育相談」を担当しつつ、通級指導教室(※)の授業もしています。

朝のSHR(ショートホームルーム)でのことです。右手をちょっ

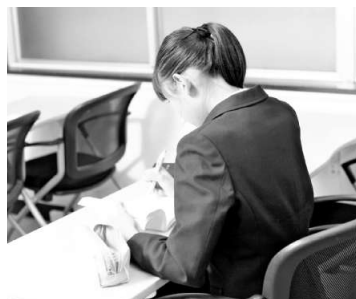
と上げ必ずスマホでゲームを見ている男子がいました。朝の連絡をしている担任に視線は向いていません。私は副担任なので「どうしてもいつもスマホを見ているの?」と声をかけました。「画面を見ているけど、本当は見えていない」という返事。よくよく話を聞いてみると、「何かしているフリをするためにスマホを握っている」と話してくれました。この生徒は教室ではほとんど仲間との関わりを持たない生徒で、休み時間も常に同じポーズです。学校は社会の縮図と言われますが、同じような光景があるなあ、電車内でスマホを眺めている大人も、目的を持って見ている人は本当は少ないのかなと思いました。

最初に勤めた技能連携校は、全日制の高等学校に通うことが困難

1 困難さを持つ生徒たちと

な生徒たちが通信制の高等学校に籍を置きながら卒業に必要な単位を取れる学校でした。30年前、社会全体で子どもたちが抱える困難さへの理解は浅く、「不登校」は「登校拒否」と呼ばれ、「発達障がい」もほとんど知られていませんでした。友人との関係づくりに挫折し学校に来る自信をなくしている生徒、いじめられた体験から緊張が強く週何回かしか登校できない生徒、こだわりが強く何日も入浴せず体臭がきつい生徒…。

彼らと出会い、「この子たちの役に立てる教員になりたい」「楽しい授業ができるようになりたい」と、心の底から思うようになりました。授業をするやりがいと



自分のペースで(本文と関係ありません)

困難さを持つ生徒たちに向き合う時間は、私にとって同じくらい大切です。今の生徒たちの姿、先生たちや学校の様子をお届けできたらと考えています。

※障がいなどで学習や生活で困難がある子どもたちを対象に、困りごとに合わせて一部の授業を別の教室で受ける制度